

県民に開かれた水産研究所の基本構想

業務名	水産研究所鳴門分場に係わる基本構想策定事業 調査業務（13-440）
委託者	徳島県
担当者	（笠原宏紹）、藤田伸也

1. はじめに

現在の徳島水産研究所鳴門分場は、建設後40年近く経過し、施設の老朽化が進むとともに、海の環境保全に関する研究など新しい研究の展開が求められ、機能の強化が必要になっている。しかし、敷地が狭隘で現在地での改善は困難なことから、本県北部海域及び内水面の漁業振興のための試験研究及び指導機関として新たな時代の要請に応えるため、施設の移転改築を検討した。

移転場所は、「鳴門ウチノ海総合公園」内に公園施設の一部として整備することとして検討を行った。「鳴門ウチノ海総合公園」は、「自然との共生、自然とのふれあい」をテーマに「海と気軽に接して海との係わり合いを学び、体験し、味わい楽しむことができる公園」を基本コンセプトとする都市公園である。このため、本施設が県民に開かれた水産試験所として試験研究機能と公開学習機能がより高い次元で共存できる施設となる事を目指して、この基本構想をとりまとめることにした。

2. 計画地周辺の概況

徳島水産試験所鳴門分場は、四国の東部、徳島県の北東部に位置し、四国本島部と大毛島、島田島、高島からなる。また、北部は瀬戸内海（播磨灘）東側は紀伊水道に面している。

計画地前面のウチノ海は、面積3.9km²の静穏な海域であり、四国本島部 - 島田島間および大毛島間で瀬戸内海（播磨灘）側へ、四国本島部 - 大毛島間で紀伊水道側へ連絡しており、これら海峡部は全て架橋によって結ばれている。

現在の徳島水産試験場鳴門分場の立地場所および移転計画場所を図 - 1、全体位置図を図 - 2 に示す。



図 - 1 徳島水産試験場鳴門分場の立地場所および移転計画場所

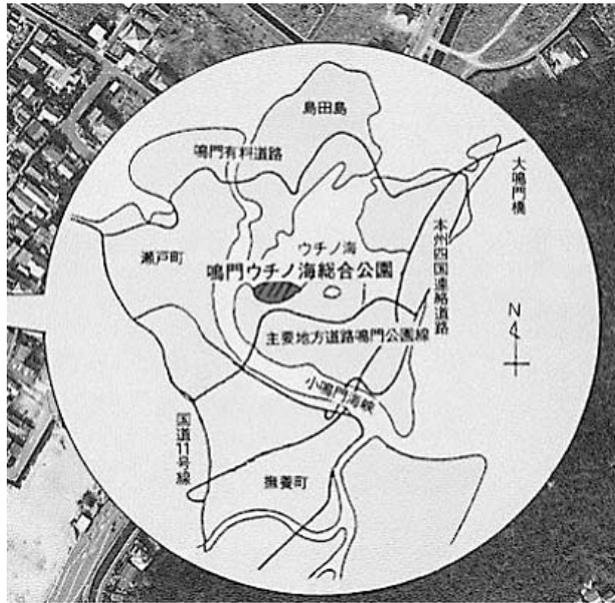


図 - 2 全体位置図

3. 公開施設の基本的な考え方

徳島県の海がもたらす豊かな幸は、県民にとって貴重な財産であるが、この海がもたらす幸も無限のものではなく、豊かさを守るための努力が必要な時代となってきている。

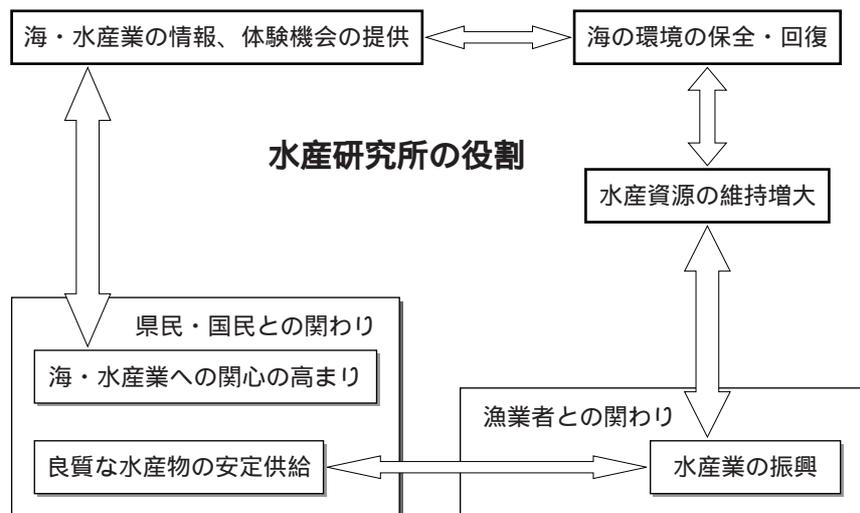
このため、沿岸漁業を主体とする本県漁業においても、持続的な資源の利用を図ろうとする資源管理型漁業への移行が重要な課題となっており、漁業生産の前提となる水産資源の維持・増大、さらにその前提となる海の環境の保全・回復を図る必要がある。

海の環境保全・回復には、県民全体の理解と支援が必要であり、今後の水産研究所には、従来の試験研究機能に加え、水産業や海の生態等についての情報提供や体験学習等の機会を提供する公開機能が求められる。

徳島県水産研究所鳴門分場は、鳴門ウチノ海総合公園内への移転が予定されており、その立地特性から、学校教育や社会教育に貢献できる「海の体験学習施設」としての役割を担うことが期待される。県民に「海の環境」や資源を大切にする意識の醸成を促すような、開かれた施設づくりに取り組むこととする。

表 - 1 に水産研究所の役割について示す。

表 - 1 水産研究所の役割



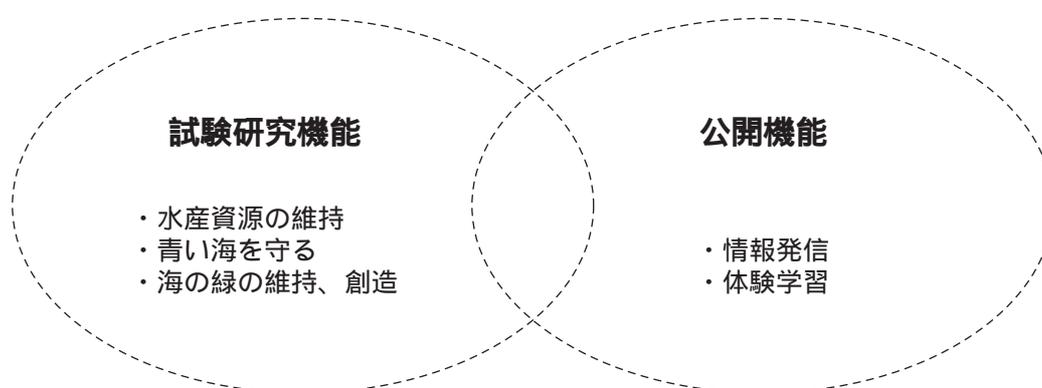
4. 試験研究機能と公開機能の調和

鳴門分場は、藻類について全国屈指の試験研究蓄積を有しており、藻場造成や藻類養殖、漁場環境の保全を主な研究テーマに、得意分野をより高度化していくための取り組みを行っている。このような高度な試験研究機能を維持・向上していくためには、研究対象が生物であるという性格上、ウイルスなどの防疫等が不可欠であり、多くの人に開かれ親しまれる公開機能の条件とは必ずしも一致しない点がある。

そこで、それぞれの機能を追及する部分と機能の融合が可能な部分とを空間的に分離・調整、視覚的な融合等により、試験研究機能と公開機能の調和を図ることとする。

表 - 2 に試験研究機能と公開機能の調和イメージを示す。

表 - 2 試験研究機能と公開機能の調和



5. 公開の方向性

本施設の基本的な性格は、紀伊水道、播磨灘海域の漁業および内水面漁業に関する試験研究、調査、指導のための中枢的施設であるが、漁業者、県民のニーズに合わせ、施設内に情報発信機能、体験学習機能を持たせた、県民への公開を前提とした施設とする。

公開にあたっては、漁業後継者対策への貢献や社会教育、学校教育への貢献を行えるよう留意する。また、本施設は、鳴門ウチノ海総合公園内に立地することから、公園の魅力づくりの一端を担えるよう周囲の施設と連携するとともに、建設地の歴史的な背景（塩田跡地等）や環境循環型社会の大切さを啓蒙できるように配慮する。

6. 公開施設の方針

公開施設は、来場者の利便性と円滑な運営に配慮し、展示機能、管理機能、運営機能の調和がとれた施設構成とする。また、施設の建物を平屋建てにするとともに、車椅子対応のスロープなども配置し、高齢者や身体の不自由な方でも安心して利用できるバリアフリーに配慮し、太陽光発電や風力発電等を取り入れた環境循環型施設とする。

公開施設を構成する諸室と機能を表 - 3 に示す。

8. 管理運営について

公開部分は、水産研究所の人員で対応することを想定している。したがって、公開機能の規模が大きくなり過ぎると、それに関わる労力・費用が増大し、試験研究に支障をきたすことも考えられるため、なるべく負担の少ない方向で公開部分の管理運営体制を構築する必要がある。

特に、鳴門ウチノ海総合公園には土日に多く人が訪れると考えられるが、水産研究所は基本的に土日が休みであり、また研究対象の生物に対してウイルス等の防疫などに配慮が必要なため、研究所休日の警備体制や公開部分の適切な区分け、動線を分離した通路、見学方法などを検討する必要がある。図 - 4 に施設見学者の動線イメージを示す。

公開エリアは、説明者が常時対応できないことを考慮し、見学通路、案内板（説明板）などを設置して、可能な限り説明者なしでも見学できるようにする。また、水産研究所が休日のときは、公開エリアの警備を警備保障会社に委託する。

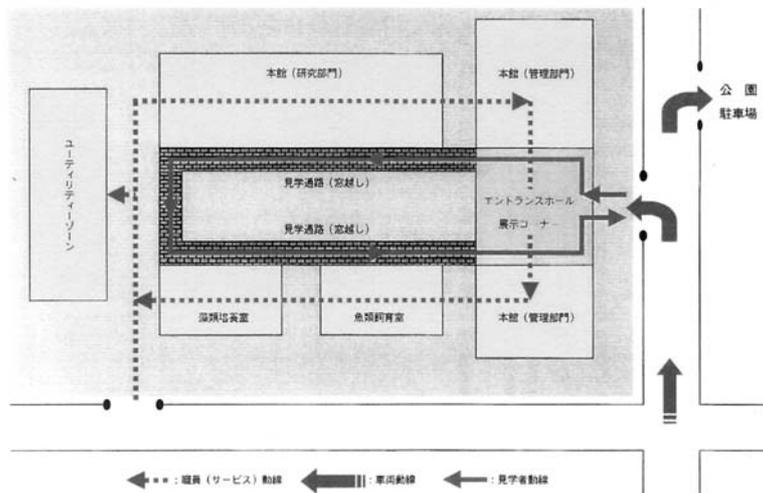


図 - 4 施設見学者の動線イメージ

9. 施設の名称

多くの人に親しまれる施設にするには、イメージを膨らます愛称も有効と考えられる。名称自体の工夫や公募等により人々の関心を高めるなどして、県民に親しまれる愛称をつける。以下に、いくつかのキーワード・愛称案を例示する。

徳島 とくしま 鳴門 なんと 阿波 あわ 渦潮 うずしお
 海洋 海 うみ マリン シー お魚 おさかな 水 アクア
 水産 試験 研究 科学 技術 夢 未来 拓く テクノ
 フィッシュ フィッシャリー サイエンス エコロジー バイオ
 館 センター ミュージアム ラボラトリー 学校 スクール
 徳島の海を拓く 『徳島うみの未来館』 『なんと海拓館』
 『水と魚のエコスクール』 『おさかな科学館』 『阿ク波お魚テクノ館』